

第十八回 吳国太仏寺ごこくたいぶつじに新郎しんろうを看るみ、玄德智ちもて孫夫人そんふじんを激げきす

— 荊州争奪戦（二） —

（前回から今回まで）

こうして、劉備は、荊州で着々とその支配地を拵ひらげていきますが、この時、もともと病弱であつた劉琦りゅうきが亡くなりなりました。劉琦は前の荊州刺史りゅうし劉表りゅうひょうの長男で、劉備陣營ちんえいにいて劉備の荊州支配を正当化する存在そんざいでした。その劉琦が亡くなつたので、孫権は魯肅ろしゆくを派遣して、約束通り荊州を返還りこするよう求めます。

魯肅が約束の履行りこうを求めると、諸葛亮は、自分が東南の風を吹かさなければ赤壁の勝利はなかつたとまくしたて、ひとまず荊州を借り受けるという形にして、やがて蜀を手に入れたら荊州を返却するといひます。魯肅はやむなくこれに同意し、誓約書を受け取つて帰つていきます。誓約書ちやくしょを見た周瑜は、またしても諸葛亮にいくるめられたのかと、地じだんだふんで悔くやしがります。

※史実から見る荊州問題

歴史地図で見ると、当時の荊州は、日本地図を切り貼りしたら、すっぱり収まるぐらいの広さがあります。この荊州が、「赤壁の戦い」後の抗争と駆け引きの場となります。

史実では、このあと周瑜は一年がかりで南郡（江陵）を攻略します。南郡に駐屯した曹仁は、追われて荊州北部の襄陽へうつります。

『三国志演義』では、このとき諸葛亮が策略をめぐらし、南郡・江夏（荊州）・襄陽を奪い取ったことにしていますが、これは、諸葛亮の智謀を際立たせるためのフィクションです。

この時点で、襄陽を中心とした荊州北部は曹操の勢力範囲、一方の長江中流は南郡を周瑜が、江夏（荊州）には程普がいて、こちらは呉の勢力範囲です。

劉備は、周瑜が南郡を攻略したときに、荊州南部の四郡（武陵・長沙・桂陽・零陵）を攻め取っています。

武陵郡、長沙郡は長江からそれほど離れていませんが、桂陽郡、零陵郡は南方の僻地です。土地は広いが未開の地で、異民族も多く住んでいました。周瑜が攻略した南郡（江陵）とは比較になりません。南郡は東西南北、四方に通じる戦略上の重要拠点でした。

ついで、劉備は、北上して南郡（江陵）の対岸にある公安に駐屯します。こうして、周瑜と劉備が、長江をはさんで睨み合う形になりました。

周瑜が亡くなると、魯肅が呉の総司令官になります。魯肅は、劉備を警戒した周瑜とは違い、劉備に手を差しのべ、共同して強大な敵曹操にあたるうとします。そのためには、劉備に力をつけさせねばなりません。

呉の総司令官となった魯肅は、荊州問題を、劉備が蜀の地を手に入れるまで荊州南部を貸与するという形で決着させます。これを聞いたとき曹操は手紙を書いていましたが、衝撃のあまり筆を落としたと『三国志』は書いています。曹操は、この孫権と劉備提携の意味をはつきり理解していたのです。

このあたりは、アメリカの戦後の日本占領政策を思い起こさせます。戦後、日本が二度と立ちあがれないよう、農業と牧畜だけの国にしてしまえとの強硬論が大勢を占めるなか、アメリカ国務省内の知日派ちにはが占領政策をリードします。占領政策は、戦後、世界情勢が冷戦れいせんに移行するなか、日本をアメリカのパートナーとして育てる方向になります。また、占領軍総司令官のマッカーサーもそれをよく理解していました。戦後の食糧危機に際し、「私が総司令官である限り一人の日本人も餓死させない」といい切ります（『日米戦争と戦後日本』、五百旗頭真いおきべまこと、大阪書籍）。敵国から友好国に、これは功を奏しました。

曹操に破れて逃げてきた劉備にとって、魯肅が呉にいてくれたことは、大へん幸運でした。

こうして、劉備は自分の地盤を手に入れ、「天下三分」の第三極に食い入ることができたのです。

強大な曹操を前に、孫権と劉備が争えば「鵜蚌の争いいっぼう（共倒れになり第三者を利すること）」になります。孫権と劉備は協力する相手であつて争う相手ではないというのは、諸葛亮の「天下三分の計（隆中対）りゅうちゅうたい」の認識でもありました。

少しややこしいですが、以上が、『三国志』から見た荊州問題の経緯けいゐです。ですから、史実の魯肅は、「三国鼎立ていりつ」の大構想を描いた人なのです。

さて、『三国志演義』にもどりますと、人のいい魯肅は諸葛亮にうまくあしらわれ、逆に、蜀を攻略したら荊州を返還するという誓約書を受け取つて帰ってきます。周瑜は、魯肅の人のよさにあきれかえります。

このとき劉備の妻の甘夫人かんふじんがなくなります。その報せしらが、周瑜のもとにもたらされます。すると周瑜は、孫権の妹を劉備の後妻ごさいとして嫁よめがせ、呉にやって来た劉備を捕らえて、荊州と交換しようと策をめぐらします。そして、呉から劉備のもとへ使者がやってきます。

さて、劉備は甘夫人を失って、日夜、悲嘆ひたんにくれていた。ある日、呉から呂範りよはんが来たとの知らせがあった。諸葛亮は笑いながら言った。

「これは周瑜の策略です。荊州のことで来たに違いありません。何を言われても、聞いておくだけにしてください。のちほど、ご相談しましょう」

「皇叔こうしゆくには奥方を亡くされたとのこと。差し出がましいと存じましたが、仲人なこうどをいたしたく参上しました」と呂範。

「葬儀が済んでまだ間もないのに、再婚する気はありません」と劉備。

「わが呉侯いもうとぎみの妹君は、美しくまた聡明で、妻の座にふさわしい方です。もしご両家の縁組がととのいましたら、曹操は東南をうかがうことができなくなるでしょう。これは兩國こくたにあって好都合というもの、どうか皇叔にはお疑いになりませんよう。ただ、当方の国太こくた（君主の母をいう）の呉夫人は姫君をたいへん可愛がつておられ、遠方に嫁とつがせることを承知なさらず、皇叔こうしゆくに呉までおいでいただきたいと申されるかもしれませぬ」と呂範。

「私はすでに齢よわい五十に近く、髪に白いものが混じっています。呉侯いもうとぎみの妹君いもうとぎみはお若いとあっては、釣り合いがとれないでしょう」と劉備。

「呉侯の妹君は、女の身でありながら、男まさりの志をお持ちで、いつも『天下の英雄でな

ければ嫁ぎません』と言っておられます。皇叔は名声が、天下に鳴り響くお方ですから、まさにお似合いのご夫婦、と齡の差など問題になりません』と呂範。

(解説)

劉備は躊躇ちゆうちゆうしますが、結局は諸葛亮の言葉にしたがい、この縁談を受け入れることにします。そして、趙雲を護衛にしたがえ、孫権のいる南徐なんじょに向かいます。

この時、諸葛亮は、三つの計略を袋に入れて、趙雲に順番に開くように言って渡します。趙雲が南徐に着いて第一の袋を開けると、劉備が孫権の妹と結婚することを街中に吹聴ふいちようし、あわせて劉備を喬国老きやうこくろう(二喬の父)に会わせて、劉備から婚礼の話を知らせるようにとの指示でした。喬国老は劉備から婚礼の話を聞くと、すぐに呉国太のところに行きます。

(本文抄)

喬国老が呉国太にお祝いを述べると、呉国太は言った。

「お祝いの心当たりはありません」

「姫君は劉玄德どのに嫁がれるとのこと、お隠しにならずともよろしいでしょう。玄德どの

はもうここに来ていますよ」と喬国老。

「わたくしはそんなことは聞いていません」と、呉国太はびっくりした。

しばらくして、孫権がご機嫌うかがいに来たので、呉国太は声をあげて泣き出した。

「母上、どうなされました」と孫権。

「わたくしはおまえの母親、何事もわたくしに相談すべきでしょう。おまえは劉玄徳どのを婿むこに迎えようとしているのに、わたくしに一言ひとことの相談もないのはどうしたことです。娘はわたくしのものですよ」と呉国太。

「いえ、これは実は周瑜の計略なのです。荊州を取りもどすために、婚礼と詐いつわって劉備を誘い出して捕まえ、やつと荊州を交換しようとしているのです。もし、言うことをきかなければ、劉備を斬きってしまいます」と孫権。

「おまえは、わたしの娘を使つかって、美人局つつもたせをしようとするのか。劉備を殺せば、あの子は嫁入り前に寡婦かふになり、二度と嫁入りすることができなくなってしまうではないか。娘の一生を台なしにするなど、そんなことは許しません」と呉国太。孫権は返す言葉もなかった。

(※そこで、呉国太は、自分が劉備に直接出会い、どんな人物かを見たうえで判断すると言います。)

さて、喬国老は、人をやって劉備に、「明日、呉侯と呉国太が会いたいと言っておられませんが、くれぐれもお気をつけください」と伝えさせた。

翌日、呉国太と喬国老が会見の場である甘露寺かんろじに着くと、孫権が、劉備を案内して来るよう命じた。

劉備は内側うちがわに鎧よろいを着込んで、その上に錦きんの戦袍せんぼうを羽織り、剣をもった従者を従えて、甘露寺へと向かった。

趙雲が五百の軍勢を率いて随行する。

劉備は甘露寺まで来ると、まず孫権に挨拶した。孫権は劉備の並々ならぬ風貌ふうぼうを見て、思わずたじたじとなった。二人は挨拶がすむと、方丈ほうじょうに入って呉国太に対面した。

呉国太は、劉備の風貌ふうぼうを見て、大いに喜び、

「これでこそ、わたしの婿むこなのです」と喬国老に言った。

「玄德のものには、天子のようなりっぱな風格があります。さすがは、天下にその仁徳じんとくを知られた方です。国太さまにはこんな立派な婿むこどのを迎えられ、ほんとうにおめでとうございませう」と喬国老。

劉備は礼を述べてから、ともども宴にのぞんだ。

すると、趙雲が劍を帯びたまま入つて来て、劉備の側に立った。

呉国太は言った。

「こちらは何なたですか」

じょうごん ちようしりゆう

「常山の趙子龍です」と劉備。

「当陽の長坂で阿斗どのを救つた人ではないですか」と呉国太。

「そうです」と劉備。

「見事な武者ぶりです」と呉国太は言い、趙雲に酒を賜つた。

と、趙雲が劉備に言うことには、

ろうか

「廊下を見回りましたところ、衛兵がひそんでおりました。きっと何か企みがあるに違ひあ

りません。国太さまに申し上げたほうがよろしいでしょう」

ひそます

そこで、劉備は呉国太の前に跪き、涙を流して言った。

「もし私の命がご入用であれば、この場で殺してください」

「なにをおっしゃるのですか」と呉国太。

「廊下に衛兵がひそんでおります。私を殺そうとするためではありませんか」と劉備。

呉国太は激しく怒って、孫権に向かい、

「玄徳どのはわたくしの婿となられたからは、わたくしの息子同然です。廊下に衛兵をひそませるとは何事ですか」

孫権は知らないふりをして、呂範を呼んで問いただしたところ、呂範は賈華かに責任を押しつけた。そこで呉国太は賈華を呼びつけて厳しく叱った。賈華が返答できずにいると、呉国太が賈華を斬れと命じた。

劉備は「いま大将を斬るのは、せっかくの婚礼を前に不吉です」と言い、喬国老もなだめたので、呉国太も怒りをおさめ、賈華を叱りつけて立ち去らせた。

数日後、孫夫人（孫権の妹）と劉備は婚礼をあげた。夜になり客が帰ると、左右に並んだ紅い提灯ちやうちんの中を、劉備は新婦しんぶの部屋に案内された。

ふと見れば、灯火のもとに、鎗やりや刀がびっしり並び、剣をおび刀を持った侍女じじょが、ずらりと立っていた。劉備はあっと仰天ぎょうてんし、魂も吹っ飛ぶ思いだった。

と、老いた侍女が進み出て言った。

「旦那さま、お驚きになりませんように。奥方さまは幼いころから武芸がお好きで、いつも侍女に剣術の試合をさせて、楽しんでおられます。それゆえ、こんな具合なのです」

「これは、奥方がされることではありません。落ち着かないので、どうかかたづけしてください」と劉備。

侍女が孫夫人に「部屋のなかに武器が並んでいると、新郎しんろうが落ち着かれませんかから、かたづけられますように」と伝えると、孫夫人は笑いながら言った。

「半生はんせいの間、戦いつづけて来られたのに、あんなものを怖がるなんて」

そこで武器をすべてかたづけさせ、侍女にも剣をはずすよう命じた。その夜、劉備と孫夫人は結ばれ、二人の仲はたいへん睦まじかった。

(解説)

『三国志演義』は、女性が活躍する場面はほとんどありませんが、ときおり架空かくうの女性に、その個性を発揮させて活躍させています。「美女連環の計」の貂蟬ちようせんがその典型的な例ですが、今回の呉国太もその一例です。

呉国太は姉の呉夫人と一緒に孫堅そんけんに嫁ぎ、呉夫人は孫策と孫権の母、呉国太はここに登場する孫権の妹（孫仁・孫夫人）の母という設定です。孫権は、母の呉夫人が亡きあと、呉国太を実の母のようにして仕えます。

曹操の大軍が南下したとき、呉国太はしゅんじゅん 逡巡する孫権に、「亡き孫策は内のことは張昭、外のことは周瑜に聞けと言ひ残したではありませんか」ときじよう 気丈に励ましています。

今回は二回目の登場で、初めは自分の娘と劉備の結婚に反対しますが、劉備を見るといっぺんに気に入り、小細工を弄ろうしようとした孫権を叱りつけます。毅然きぜんとした芯しんのある女性として描きます。劉備を殺そうとした孫権の家来は、すぐごと引き返すしかありませんでした。呉国太の芯の強さを描く、痛快な場面です。

いっぽう、孫権の妹の孫夫人は『三国志』に名前が出る実在の人物ですが、『三国志演義』では、かなり脚色して描かれます。

孫夫人が劉備に嫁いだのは史実です。

「先主伝」に「孫権はだんだん先主（劉備）を畏おそれるようになり、夫人として妹を与え友好關係を固めた」とあり、「ほうせい 法正伝」にはその人柄を、「孫権は妹を先主にめあわせたが、妹は才氣と剛勇において兄たちの面影おもかげがあった。侍婢じひ百余人はみな自分で刀を持ち侍立じりつしていた。先主は奥に入るといつも心底から恐怖を覚えびくびくしていた」あります。

また、「趙雲伝」の注の「趙雲別伝」に「このころ、先主の孫夫人は孫権の妹なのを鼻にかけ驕慢きやうまんで、大ぜいの呉の官兵を率いて、したい放題をやつて法を守らなかつた。先主は趙

雲が厳格であるために、引き締めることができるにちがいないと判断し、特に任命して奥むきのことを取りしきらせた」と書いています。

つまり、孫夫人の侍女百余人が皆武装しているので、劉備は奥に入るときは常に怖れていた。彼女が、孫権の妹であることをかさききて、驕慢きょうまんで自分勝つてな行動をしたので、厳格な趙雲を監視役として置いたのです。

また、同じく「法正伝」に、諸葛亮の言として、「主君（劉備）は公安こうあんにおられたとき、北方では曹公の強大さにおびえ、東方では孫権の圧迫に気がねし、近くは孫夫人が手元にあつて変事をおこさぬかと心配しておられた」とあり、諸葛亮が、孫夫人の存在を、劉備陣営の内憂ないゆうとして認識していたことがうかがえます。そのために、趙雲に監視させていたのでしよう。

夫の劉備にも掣肘せいちゆうされず、呉と気脈を通じる孫夫人の姿が浮かびあがります。事実、このあと孫夫人は、劉備の後継ぎの劉禪を連れて、無断で呉に帰ろうとしますが、趙雲が劉禪を取りもどして事なきを得ています。

『三国志演義』は、「劉備と孫夫人は結ばれ、二人の仲はたいへん睦まじかつた」と書きますが、それはフィクションです。

さて、策略が失敗した周瑜は、今度は、劉備を呉にとどめて贅沢ぜいたくさんまい三昧の生活をさせ、骨抜きにしてしまおうと考えます。

(本文抄)

周瑜は孫権に手紙を書いて、

「劉備には梟雄きょうゆう（悪賢い英雄）の相があり、関羽・張飛・趙雲といった猛将を擁し、これに加えて諸葛亮が知謀をめぐらしているのですから、いつまでも人の下についている者ではありません。」

やつを呉に取り込めて、盛大な館やかたを建ててやつてその志を忘れさせ、美女を送り込んで遊興ゆうきょうにふけらせ、やつじもくの耳目を楽しませてやるのです。こうして関羽・張飛との仲を裂き、諸葛亮とのつながりをなくして、彼らの心をばらばらにしたうえで、一気に攻撃をかければ、目的を達することができます。

今、やつを解き放つのは、蛟龍こうりゆうに雲雨を与え、天に昇らせることになります」と。

孫権は、ただちに屋敷を修築して、多くの花や樹木を植え、調度品を置いてから、劉備と妹を移り住ませた。

さらに、数十人の歌妓かぎをふやし、金銀・珠玉・錦・絹など贅ぜいをこらした品々を与えた。呉国太は、孫権の好意だと思ひ込んで大へん喜び、劉備も案の定、楽しみにうつつをぬかして、荊州に帰ることも忘れてしまった。

(解説)

この場面は、『三国志』周瑜伝にある周瑜の上疏じょうそがもとになっています。劉備が呉に行つて孫権と会見したときの話です。

「劉備は梟雄きょうゆう（野心ある英雄）としての資質を備え、しかも関羽や張飛といった勇猛無比の將を部下にもつておりますゆえ、必ずやいつまでも人の下に屈し他人の命令に従つてはおらぬでありますよう。

愚考ぐこういたしますに、遠い将来を見通して、劉備を呉に移し置かれ、彼のために盛大に宮殿を建て、美女や愛玩物あいがんぶつを多数集めて、その耳目じもくを楽しませてやり、一方では、関羽と張飛との二人を分けて別々の地方に配置し、たとえば私のような者が彼らを手足として使つて戦いを進めれば、天下統一の大事業も、その成功は確かなものとなります。

もし今、土地を割き与えて劉備に基盤を作つてやり、この三人をいっしょにして国境地帯

におらせますならば、蚊みずちや龍りゅうが雲雨を得て天に昇りますように、おそらくはいつまでも池中ちちゅうに留まっておらぬでありましょう」と孫権に言いますが、孫権はこの提言を受け入れませんでした。また、本文抄には『三国志』には書かれていない「しかも諸葛亮が知謀をめぐらしている」という言葉を書き入れて、周瑜の諸葛亮に対する警戒心を強調しています。

また、劉備が「楽しみにうつつをぬかして、荊州に帰ることも忘れてしまった」としていますが、そんな事実はありません。

『三国志演義』は、「赤壁の戦い」から周瑜の死にいたるまで、周瑜と諸葛亮の対立構造を基調にして物語を組み立てています。

(本文抄)

さて、趙雲は、年の暮れに近づいたころ、ふと気がついた。

「孔明どのが私に三つの袋をわたされた時、年末になったら二つ目を開き、危急ききゆうの時には三つ目を開けよと言われた。今、殿は女色じょしょくに溺れおぼれ、わたしたちに見向きもされない。二番目の袋を開ける時だ」

そこで、袋を開いて見ると、いかにも奇策きさくだった。趙雲は、ただちに劉備に面会めんかいを求めた。

劉備は、何事かとたずねた。趙雲はことさら慌てた様子で言った。

「殿には、このような美しい部屋に閉じこもられ、荊州を忘れられたのですか」

「どうしたのだ、その慌てようは」と劉備。

「今朝、孔明どのから使者が到着し、曹操が荊州に攻め寄せて来たので、ただちににお帰りいただきたいとのことです」と趙雲。

「奥方に話さなければならぬ」と劉備。

「奥方さまに話されれば、殿が帰るのを承知されませんでしょう。いそいで出発されたほうがよろしい。遅れると取り返しのつかないことになります」と趙雲。

「しばらく下がっておれ。私に考えがある」と劉備。

劉備は孫夫人に会いに行き、暗い顔をして涙を流した。

孫夫人は言った。

「あなた、何をお悩みですか」

「私は、長年異郷をさすらい、亡き両親も、先祖もお祭りすることもできない。不孝の限りであった。今、年の瀬も迫って、思わず悲しくなったのだ」と劉備。

「お隠しになっても、わたくしはとづくに知っています。さきほど、趙雲どのが荊州の危機

を知らせに來られ、あなたはお歸りになりたいので、わざとそんなことを言われるのでしよう」と孫夫人。

「知ってしまったのなら、隠しはしない。わたしが帰らずに荊州が奪われたら、天下の物笑いとなるだろう。また、あなたと別れて行くことも忍びない。それで、悩んでいるのだ」と、劉備は跪ひざまずいて告げた。

「わたくしはあなたに嫁いだのですから、あなたのおいでのなる所は、どこへでもお供します」と孫夫人。

「国太さまと呉侯（孫権）があなたを手離すわけがない。しばらく別れてほしい」と劉備は涙を流して言った。

「わたくしが母上にお願ひすれば、お許しがいただけると思います」と孫夫人はなだめて言った。

「国太さまが承知なさつても、きっと呉侯が止めるにちがいない」と劉備。

孫夫人はしばらく考え込んでいたが、

「元旦の年賀のとき、わたくしがあなたといっしょにご先祖をお祭りすると詐いつわり、そのまま出發してしましましょう」

劉備は、感謝して言った。

「そうしてもらえるなら、あなたの恩は死んでも忘れない」

二人の相談がまとまると、劉備はひそかに趙雲を呼んで言いつけた。

「一足さきに軍勢を率いて城を出て、街道で待つておれ。私は先祖を祭ると口実を設け、奥方といっしよに逃げ出すから」

(解説)

劉備はしばらくの間、呉での楽しい生活にうつつをぬかしますが、趙雲が諸葛亮の策を用いて劉備の目を覚まし、劉備と孫夫人は呉を脱出して荊州に向かいます。

さて、結婚前は武張ったことが好きで、侍女に劍術の試合をさせて楽しんでいた孫夫人ですが、劉備と結婚するや、夫と志を同じくする妻の強さと美しさがただよいます。劉備が、荊州に行かねばならないが、あなたと別れることが辛いと言うと、孫夫人は、あなたの行かれる所へは、どこへでもお供しますと言います。この二人の真心のこもったやり取りで、劉備と孫夫人が心の絆で結ばれていることを印象づけます。これは後に、孫夫人が劉備に殉死する場面への伏線になっています。